

論文

低年齢層向けオンライン・ワークショップにおける メディアリテラシーの変化

大久保 幹太 小林 大祐 中村 雅子

本研究ではメディアリテラシーのうち、多様なメディアの特性を理解し、情報を批判的に捉えることのできる能力に注目し、小中学生を対象としてZoomを用いたワークショップを企画・実施した。ワークショップの内容は特性の異なる3つのメディアの記者役に分かれ、架空の事件についての取材、記事制作を行ってもらおうというものである。またZoomを用いてオンラインでこのようなワークショップを行う場合のメリットや課題についても検討した。事前事後アンケート、記事のコンテンツ分析等を用いて検討した結果、情報の社会的構成性を体験的に学んでもらうという目的は達成できたと考えられた。

キーワード：メディアリテラシー、オンライン・ワークショップ、小中学生、メディア制作、情報の社会的構成

1 まえがき

1.1 なぜメディアリテラシーが必要なのか

総務省の情報通信白書令和2年版によれば、2009年から2019年にかけて、日本人のインターネット利用率は78.0%から89.8%へとさらに増加傾向にある。年代別の利用率でも、この10年で全ての年代において上昇している。中でも6歳～12歳と50～80歳以上の層の変化が大きい。

インターネットの利用目的も変化しつつあり、2009年には「電子メールの受発信」「ホームページ・ブログの閲覧」「商品の購入」が上位3項目だったが、2019年には「電子メールの送受信(76.8%)」、「情報検索(75.6%)」に次いで「ソーシャルネットワークサービスの利用(69.0%)」が第3位に上昇している。情報の受け手としてだけでなく、(不特定多数に向けた)情報の発信者としてのインターネット利用が増えていることが推測できる。

このような動向から、今後一層、受信者としてのリテラシーだけでなく、発信者としてのリテラシーが求められる。そこで、本研究では次世代を担う小中学生を対象として、発信者としてのメディアリテラシー育成を目的としたワークショップを行い、その向上を目指した。

なお、2020年はCovid-19の感染拡大により、従来のような対面式でのワークショップの開催が困難な状

況にあった。そこで本研究では、Zoomを活用したオンラインワークショップにおいて、メディアリテラシーの変化を促せるかどうかを合わせて検証することとした。

1.2 メディアリテラシーについて

メディアリテラシーとは、広く言えば、メディアを用いて「読む」「書く」「聞く」能力のことを意味する。しかし、より詳細な定義や問題意識は研究者により多様である。本研究ではメディアリテラシーのうち、多様なメディアの特性の違いを理解し情報を批判的に捉えることのできる能力に注目した。

後藤(2007)はメディアリテラシーを

多様な情報メディアの特性を踏まえ、それらを情報の受信と発信に主体的に活用するとともに、情報を鵜呑みにすることなく批判的に捉えようとする態度及び能力(後藤, 2007, p. v)

と定義している。

後藤は、高度情報通信社会の到来に伴い、メディアリテラシーの育成が求められていく中で、従来のメディアリテラシーに対する相関分析では限界があるとし、構造方程式モデルを用いて人がメディアとの関係を築くときの態度やメディアに対する知覚の関係について研究を行った。この分析結果から、後藤はメディアに対する「主体的態度」が「メディア操作スキル」「メディア特性への理解」に影響を及ぼし、さらに「メディア特性の理解」が「批判的思考」に影響を及ぼしているとしている。

また菅・保崎(2009)はメディアリテラシーを「能動的にメディアを意識し、理解し、そして使用して、表現することができる能力(菅・保崎, 2009, p. 84)」と

OKUBO Kanta

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科 2020年度4年生
KOBAYASHI Daisuke

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科 2020年度4年生
NAKAMURA Masako

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科教授

した。菅らは、総合的な学習の時間や国語の時間を用いて、小学生5年生を対象にメディアリテラシーを含むコミュニケーション力育成を目標とした映像メディア制作授業実践を企画し、フィールドノートや実践後の面談から効果の検討を行った。この授業ではグループ活動でコミュニケーション能力の育成を狙い、メッセージを送る過程を児童に経験させることで送り手としてのメディアリテラシーを図った。この研究では、編集活動によってコミュニケーション能力やメディアリテラシー育成につながる様子を見ることができた。他にも、質問項目をあらかじめ準備しておくことや、聞きたいことをうまく聞き出すことの難しさのような、体験しなければ学ぶことができない部分を伝えることに成功したとしている。

メディア制作でリテラシーを育成するユニークな取り組みとしては、中高生を対象として企画された「湯けむりワークショップ」がある(水越・東京大学情報学環メルプロジェクト編, 2009)。これは参加者が架空の事件について、メディアの送り手となって問題を解決していくロール・プレイング・ゲームの要素を取り入れたワークショップである。

ワークショップで設定されたストーリーは、師走の早朝、神社の境内に続く階段の下に、出身地の再開発問題に反対を唱えていた有名作家が死亡しているのが見つかり、警察が事件・事故の両面から捜査を始めるというものである。参加者の中高生は、マスメディアの記者としてこの事件取材する。このワークショップでは、各証言者役は取材する記者のメディアが全国紙かゴシップ紙などのメディア特性の違いによって取材に対する回答が違ったり、取材に協力しなかったりする。記者役の生徒が、そもそもメディアによって何に力点を置いてコンテンツを作るかという取材・編集方針が異なることや、得られる情報が異なっていることが学べるように構成されている。また特定の情報に行きつかなければ事件解決にたどり着かないよう設計されており、推理ゲーム的な要素も取り入れている。

このワークショップの企画は当時、東京大学情報学環で学ぶ大学院生たちが、それぞれの中学・高校の教員とも協力しながら実施しており、ワークショップ内で証言者や編集部デスクの役割も担っている。水越ほか編(2009)ではこの取り組みを、通常、覗き見ることができない雑誌や新聞の取材や編集の様子を短時間で理解でき、送り手側の立場にたつて情報の構成が実感できるという点で評価している。

2 目的

本研究ではメディアリテラシーのうち、多様なメディアの特性を理解し、情報を批判的に捉えることのできる能力に注目した。このような力を養う取り組みとして

は、前述の「湯けむりワークショップ」があるが、ここでは中高生を対象としていた。

本研究では小学校高学年から中学生という、より低学年の子どもを対象にメディアの送り手を体験するワークショップを開催し、「情報の社会的構成」を理解してもらうことが可能かを検証した。

また本ワークショップはCovid-19感染拡大の状況下で対面のワークショップが実施できない中でも、オンライン形式での同様の学びの可能性を探ることも目的の一つとしている。パイロット・プログラムをデザインすることで、オンラインでのワークショップの実施上の課題や、オンラインでも意図したような効果が得られるかを検討した。

3 方法

3.1 ワorkshopのデザイン

(1) ワorkshopの意図

マスメディアの送り手は情報を届けたい受け手の特徴やそのマスメディアごとの関心の違いから同じ出来事でも違う相手に取材に行ったり、集まった情報の中から違う情報を取り上げたりする。

本ワークショップの意図は、記事制作の送り手となる体験をすることで視点の変換を行い、制作者視点で記事を扱うことで、受け手として記事を見るだけでは読み取ることのできない事実があることを理解してもらうことである。ワークショップを通して記事の制作を体験的に学ぶことで、情報の送り手の意図や、送り手の特徴を知って情報を受け取ることの大切さを学んでもらうことを期待した。

(2) ワorkshopの内容

本ワークショップでは、架空の事件について、全国新聞社の毎朝新聞、地方新聞社の都筑民報、ゴシップ紙の週刊シンジツ(いずれも架空の新聞社)に所属する各新聞社の記者役になった参加者に、それぞれのメディアの立場から取材して記事を書いてもらう。各記者が記事を発表し終わった後に、当初の狙いを解説して理解を深めてもらう構成とした。

(3) 事件の設定

記者たちが取材する事件は2020年10月4日(日)午前2時頃、都筑区のとある駅から200mほど離れた場所にある住宅で火災が発生したというものである。これはワークショップ当日の未明という設定で、記者たちはまだ消防の詳細な調査結果などが出ていない状況の中で関係者に取材し、第一報の記事を書くことになる。

火災が発生した住宅は、元々住んでいた住民は半年前に死亡していたため無人で、死傷者は出なかった。実際に火災の原因は漏電だが、原因は取材時にはまだ明ら

かになっておらず、消防からの発表では、不審火の疑いもあることが記者たちに告げられる。また取材の中では、ある証言者が五位堂という国会議員の名前を出すことで政治的な話に発展する可能性を匂わせたり、住民とマンション建設会社の間の対立の可能性を示唆するうわさを示したりすることで、どのように情報を取捨選択すべきかを考えてもらう仕掛けを用意した。

(4) 新聞社の設定

今回、参加者には、全国紙、地方紙、ゴシップ紙のそれぞれ異なる編集方針をもった架空の新聞社に分かれて配属してもらい、それぞれの新聞社の記者役として取材、執筆をしてもらった。それぞれの新聞社の編集方針は表1の通りで、後述のデスク役から説明を受けてから取材を開始する。

表1 各新聞社の編集方針

毎朝新聞 (全国紙)	全国の読者にとっての重要性を考え、多くの読者がいる責任から、不確かな情報はのせないようにする。
都筑民報 (地方紙)	地域の読者の関心を考え、地域の信頼を裏切らないよう、不確かな情報はのせないようにする。
週刊シンジツ (ゴシップ紙)	読者の期待である裏話や、好奇心にこたえる情報は、不確かなものも、不確かだと断った上で、紹介する。

(5) 当日の流れ

当日のタイムテーブルを表2に示した。最初に参加者同士で自己紹介と所属する新聞社決めを行った。次に司会から当日の流れを説明し、参加者に記者役になる新聞社を選んでもらった。担当する新聞社が決まった後、消防署の担当者役の学生が事件発生第1報を知らせた。

表2 当日のタイムテーブル

この消防発表後は、記者と各デスク役の大学生がそれぞれ担当の新聞社のブレイクアウトルーム（新聞社ルーム）に移動した。

時刻	概要
9:30	Zoomの全体ルームに参加者、フタッフが集合
9:35	挨拶、当日の流れの説明、新聞社を選び、消防署担当役から事件の第1報を聞く
9:45	各編集部のブレイクアウトルームに移動
9:55	デスク役の大学生から取材方針の説明
10:05	全体ルームで消防署広報役から火災の情報提供
10:15	編集部に戻り、取材先についての話し合い
10:25	6名の証言者のルームに移動してそれぞれ取材
10:50	各編集部に戻りデスクや同じ社の記者と情報共有、記事作成
12:00	完成した紙面の発表、記者の感想、中村からの解説・講評
12:30	終了

移動先の新聞社ルームでは、デスクが各新聞社の方針を説明し、それを踏まえて記者が自分の取材先を決めた。

取材先は、火災発見者、出火した住宅の現在の所有者、地域住民、マンション建設会社広報担当の4件である。

記者が全ての取材先へ行き終えたら、もう一度新聞社ルームへ戻り、取材先で得た情報の共有を行う。

各記者は共有した情報を元に各自記事を作成、作成した記事を全体ルームで発表する。全員の記事の発表が終わった後、参加者に当日の感想を述べてもらい、最後に中村が当日の仕掛けや狙いを解説した。

3.2 データ収集の方法

今回のワークショップでは参加者に事前事後に行ったアンケート、参加者が書いた記事、学生スタッフのフィールドノート、録画をデータとして収集した。

(1) 事前事後アンケート

アンケートを作成するにあたり、佐藤・中橋（2009）と小寺（2016）の研究を参考にした。

佐藤・中橋（2009）らは自ら発信者となる現代において有効だと考えている「メディアを読解・解釈・鑑賞する力」「メディアを批判的に捉える力」「メディアを活用して効果的に表現する力」という3つの要素を用いた計51問からなるアンケートを作成した。また小寺（2016）は汎用性のある質問項目でメディアリテラシーを計測しようと試みた。作成された項目群は「メディアメッセージの構成性」「メディアによる[社会的現実]の構成力」「メディアの商業的性質」「メディアのイデオロギー・価値観伝達」「メディアの様式と言語」「受け手の非画一的解釈性」の6尺度に分類され、探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）が行われている。

これらのアンケートから今回の実践に合わせて、佐藤・中橋らの3つの尺度のうちの「メディアの読解・解釈・鑑賞」「メディアを批判的に捉える力」の2尺度および小寺の6つの尺度のうち「メディアメッセージの構成性」「メディアによる[社会的現実]の構成力」「メディアの商業的性質」の3つの尺度を中心に17項目を抽出して、一部を本実践に合わせた文言に変更した。以上の手続きで抽出した17項目を、それぞれ「そう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4段階および「わからない」の計5選択肢で質問するアンケートを作成し、ワークショップの前と後にそれぞれ記者（およびその保護者）にメールで送付して回答を依頼し、回収した。事後アンケートでは、ワークショップへの感想等も質問した。

(2) 参加者が執筆した記事

参加者がワークショップ中に作成した記事は、録画に

映った記事と音声，ワークショップ後に返送された記事の写真を基に文字起こしを行った。記者の書いた記事は「記事に日付あり」「火災の時間を記載」「放火の可能性に記事の中で触れている」「国会議員である五位堂について記事の中で触れている」「発見者について記事の中で触れている」「負傷者について記事の中で触れている」「火災原因について言及している」「火災原因について言及している」「噂が入っているか」「建設トラブルについて言及している」という9項目ごとに記載の有無をコーディングしてコンテンツ分析を行った。



写真1 当日の様子 (Zoom 画面キャプチャ)

(3) 大学生のフィールドノート (参与観察記録)

参加した学生スタッフ10名にワークショップを行った後一日の流れ，感じたこと，記者との会話，説明，感想などをフィールドノートとして記録し提出してもらった。

(4) 動画の文字起こし

Zoomの全体ルームおよび新聞社ルーム，各証言者のブレイクアウトルーム(証言者ルーム)について許可を得て録画し，発話を全て文字起こしした。

4 ワorkshop実施の概要

4.1 参加者の募集

参加者の募集に当たり，小学校5年生から中学3年生までを対象に，地域でジュニア記者として活動する「つづきジュニア編集局メーリングリスト(30名弱)」，「みなとみらいジュニア編集局メーリングリスト(約10名)」，および横浜でミニシティ(こどものまち)の活動に関わる子どもたちが登録する「ミニヨコハマ運営者メーリングリスト(約100名)」の3つのメーリングリストに参加している延べ約140名にメールで参加を呼びかけた。またそれら以外に，研究室のウェブページ等でも告知を行った。応募した参加者は7名だった。

4.2 実施の概要

2020年10月4日(日)にZoomを利用して開催した。参加者は上記MLに参加しており，日頃から取材や記事作成を行っている小・中学生計7名(小学5年3名，6年3名，中学2年1名/男子1名，女子6名)である。

ワークショップには，その他に中村研究室学生10名，つづきジュニア編集局運営スタッフのIさん，および中村がスタッフとして参加した。

オンライン参加のための環境がない参加者には，こちらで場所(シェアリーカフェ)を設け，換気・マスク着用の上参加してもらった。Iさんにはシェアリーカフェでの参加者の対応をして頂いた。

5 結果

5.1 調査の概要

アンケートについては事前事後の計2回，アンケートをメールで送付して回答してもらい，それぞれの回答の変化を調べた。

記事については，参加者に書いてもらう際に見出し，リード文，記事の3つを必ず書いてもらうよう各新聞社のデスク役から依頼し，全員の記事を文字起こしした。

データ収集の結果，全員分の事前事後のアンケート，Zoomの録画データ，運営に携わった中村研学生のフィールドノート(10名分)，参加者全員が実際に書いた記事のデータが得られた。

5.2 分析

(1) 事前事後アンケート

データ数が少ないことから断定的なことは言えないが，事前事後アンケートから以下のことが示唆された。

「新聞について人それぞれ感じることは違う」という質問では，事前アンケートでは6人が「そう思う」，1人が「少しそう思う」と回答しており，事後アンケートでは参加者全員が「そう思う」と回答している。ここから，今回の参加者については，もともと小中学生であってもメディアからの感じ方が人それぞれであることに理解があること，ワークショップ後にはその理解がより明確になる傾向があることが示された。

「同じ出来事は，どのニュース新聞でも同じように報じられる」という質問では，事前アンケートでは2名が「少しそう思う」2名が「あまりそう思わない」3名が「全くそう思わない」と回答事後アンケートにおいて参加者7名のうち6名が「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答しており，ワークショップを通して，メディアごとに変化が出ることについての理解が深まった参加者が見られた。

「同じ新聞でも，使われている内容が異なれば受ける印象も異なる」では，事前アンケートでは「そう思う」「少

しそう思う」がそれぞれ3名で、1名が「わからない」と回答したが、事後アンケートにおいては参加者全員が「そう思う」と回答しており、ワークショップを通し、より理解が深まった。

表2 メディアリテラシー関連のアンケート項目

1	新聞は誰が見ても同じように感じる
2	新聞について人それぞれ感じることは違う
3	どの新聞を読んでも、書いてあることは同じである
4	新聞は、ひとつの出来事を多様な視点で伝えている
5	同じ出来事は、どのニュース新聞でも同じように報じられる
6	人々が重要だと考えることが、ニュースになる
7	ニュースが情報をどう伝えるかによって、人々のものの考え方は大きく変わる
8	新聞にはそれぞれの政治的立場があり、読者の考え方に影響を与えている
9	新聞は視聴者の反応を気にしながら作られている
10	新聞を作る人は、見ている人を新聞に引き込む工夫を重ねている
11	見出しの違いによって、新聞記事の印象が変わることがある
12	同じ新聞でも、使われている内容が異なれば受ける印象も異なる
13	本やテレビなどメディアで知ったことに疑問を感じたら、他のメディアで確かめる方である
14	本やテレビなどメディアで知ったことが本当かどうかについて、あまり考えない
15	面白ければどんな新聞記事でも本でも書いていいと思う
16	判断をするときは事実や証拠を大事にする
17	判断をするときは自分の好みにとらわれないようにしている

自由記述の項目では、書き手が情報をコントロールできることや、メディアの発信する情報には切り捨てられる部分があるということを理解した回答が見られた。

記事を読んでもらう人によって、書き方の工夫が必要だと言うこと・取材で分かった事実の中で明確でない情報は載せない方がいいということ・記事を書くとき情報が明確でない場合には後から付け足せるような内容にすること・5W1Hを書くこと
(小学6年女子、事後アンケート感想)

相手に質問した中で、大事な事だけを切り取り新聞に書くことは大変な事なんだと思いました
(中学2年生女子、事後アンケート感想)

担当したメディアごとにアンケート結果を分類したが、大きく異なっている項目はなく、事前事後アンケートからメディアごとの差を見出すことはできなかった。

(2) 記事

記者の書いた記事の中で、全員が記事の中に入れていた項目は「火災の時間を記載」と「発見者について触れている」の2項目だった。

新聞社ごとの特徴としては、①週刊シンジツのみが五位堂について記事の中で触れていた、②毎朝新聞のみが

火災原因について言及していた、③毎朝新聞のみがマンション建設会社が火災に関与しているのではないかとこの噂があることに触れていなかった という3点が上げられる。

①の五位堂(国会議員)の関与については、証言者の憶測による情報だったため、毎朝新聞と都筑民報では、情報の裏取りができていないので記事にすることができないと考えたのに対し、週刊シンジツでは、情報が不確かでもそのように断りを入れた上で、ゴシップ的要素として記事にすることができると説明されたために、唯一、記事の内容として五位堂について触れたものがあつたのではないかと考えられる。

②の火災原因については、消防発表のみのため、特に新聞社ごとに違いが生じる項目ではないはずだが、毎朝新聞の記者のみが詳しく言及していた。考えられることとして、毎朝新聞は全国紙と言う特性上、他の新聞社に比べて地域の個別事情に踏み込んだ内容の記事が書けないため、火災原因に着目したのかもしれない。

(3) フィールドノート

参加者がワークショップを楽しんでくれている様子や、真剣に取り組んでくれている様子に関する記述が見られた。

全体ルームに帰ってきた記者達を見るにワークショップの取り組みは意欲的だったと感じている。帰ってくるなり次はこの証言者の場所、次はデスクに戻りたいと次に何をしたいかビジョンをもって取り組んでいる様子うかがえた。

((Zoom オペレータ担当学生のフィールドノート))

デスクルームでは参加者が積極的に発言しており、デスク役の自分が話題を振らずとも情報共有がスムーズに進んでいたと感じた。
(都筑民報デスク役のフィールドノート)

なお、開催中にZoomの操作に関して、ブレイクアウトセッションに割り振る際にうまく行かず、すべての人を一度メインセッションに戻さざるを得ないケースが時折発生したことなど、技術上のトラブルも生じ、これについてもフィールドノートに記述されることで詳細が明らかになった。iPad版とPC版のZoomで挙動が違っていたためにPCを使ったりハーサルで予期しなかったトラブルだった。

(4) Zoomの録画データ

全体ルーム、証言者(取材対象者役)および各新聞社のブレイクアウトルームについて、録画の文字起こしを行った。当日の各参加者の動きやデスク役、証言者役などとのやり取りを確認した。また記事については一部不

明瞭な点を録画の文字起こしによって補うことができた。

6 考察

6.1 ワークショップ参加者の理解

今回のワークショップの目的は、情報の社会的構成という観点や、マスメディアの記事には書かれていない事実が存在することを体験的に学んでもらうことであった。参加者は地域でジュニア記者活動をしており、参加前から一般の小中学生より理解度が高かった。しかし、自由記述や口頭での感想を事前事後アンケートと合わせて検討すると、記者がお互いに自身の書いた記事を発表することや、最後の解説も含めて、このワークショップでさらに理解を深められたのではないかと考える。

なお、企画の段階では、モデルにした「湯けむりワークショップ」で組み込まれていた、証言者（取材対象者）が特定のメディアに対しては証言をしない・あるいは一部しか話さない、という仕組みを組み込むことも検討したが、Zoomで開催するに当たり、技術的に難しかったこともあって、証言者の情報は全てのメディア記者が同じように入手できるようにした。結果的には、構成の複雑さを低減して、メディアによって発信する情報に切り捨てられる部分があるという点を理解してもらいやすくなったと考えられる。

6.2 開催方法についての考察

今回のワークショップでは、さらに新しい試みとして、対面のワークショップではなく、オンライン（Zoom）での実施の効果を検討した。

先行事例である湯けむりワークショップとは、仕掛けや設定が異なっている部分もあったが、オンラインであっても、当初意図した効果はある程度得られたと考えられる。

またワークショップの進行に関して、デスクでの取材方針会議、取材、メディアごとの情報共有など、場面転換については物理的な場所の移動を伴わず、ブレイクアウトセッションに振り分けるのみで成立するため、移動や設営のための時間やコストを軽減することができた。

このようにワークショップをコンパクトにデザインできる点ではZoomの各種機能を活用することで、対面より優れている点も見出すことができた。記録の容易さという点でも録画機能が活用でき、別に撮影担当を置かなくてもすむというメリットもあった。

参加者の本ワークショップへの評価は高かったが、一方で五感を駆使して活動する対面形式のワークショップと比べて、参加者にとってのワクワク感や楽しさ、参加者相互のコミュニケーションは制約されたかも知れない。

なお、小中学生がオンラインでのワークショップに参

加する際には、本人の情報機器操作面での一定の習熟や、保護者の理解と協力が欠かせない。このような点も参加の制約となっていたと考えられる。この点については、今後、小中学生にもオンライン学習が普及すると実施の環境が整ってくることを期待される。

今回のワークショップは参加者数も限られ、またCovid-19の感染拡大の状況を考慮してオンラインワークショップ形式で行ったが、可能であれば対面でも同様のワークショップを行い、引き続きデータを集めて効果を比較することが望まれる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、ワークショップに参加して頂いた方々や大学生スタッフ、多くのご協力を頂いた皆様に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 後藤康志 2007
メディア・リテラシーの発達と構造に関する研究
新潟大学大学院現代社会文化研究科博士学位論文
- 岩崎裕月・栗原拓海・中村雅子 2021
岩崎オンライン授業における大学生の学習環境デザイン 情報メディアジャーナル 本号, p. 13-21
- 小寺敦史 2016
メディア・リテラシー測定尺度の作成に関する研究 東洋英和女学院大学 人文・社会科学論集 34巻, p. 89-106
- 水越伸・東京大学情報学環メルプロジェクト編 2009
メディアリテラシー・ワークショップ：情報社会を学ぶ・遊ぶ・表現する 東京大学出版会
- 佐藤和紀・中橋雄 2009
動画共有サイトへの作品公開に関する議論の学習効果：映像制作実践で育まれるメディア・リテラシー 教育メディア研究 21巻1号, p. 1-10
- 菅勇希・保崎則雄 2009
小学校5年生における映像メディア制作授業の実践と評価：児童、担任、授業補助者の省察 教育メディア研究 15巻2号, p. 83-94

参考サイト

- 総務省 令和2年情報統計通信データベース
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/r02.html>（最終確認日2021年1月18日）
- 総務省 平成21年情報統計通信データベース
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/h21.html>（最終確認日2021年1月18日）